

ナスの整枝に関する研究  
(第2報) 葉面積および葉位が生育、収量、品質に及ぼす影響

室 園 正 敏・近 藤 雄 次  
(福岡県立園芸試験場)

MUROZONO, M. and KONDO, Y.

Studies on the Training of Egg plant

2. Effects of Reducing Leaf Area and Thinning Position of Leaves on the Growth, Yield and Quality of Egg-Plants

前回の報告において、ナスの摘葉処理はその程度と主枝の発育とが相互に関連し、その結果、生産性や品質の良否などを左右することを明らかにしたが、今回は、葉面積や葉位などが果実の発育に及ぼす影響について検討を行なった。その結果を報告する。

試 験 方 法

アカナス台に接木した黒陽を供試し、10月25日には種、1月20日に定植して加温栽培を行なった。栽植間隔はうね幅2mに株間0.3mとし、主枝は2本仕立で、1.6~1.7mで摘心し、側枝は一部を除いて3節摘心切戻しとした。試験区は葉面積、摘葉、葉位の3つを設け、葉位試験では主枝の4~5節花開花当時の株を処理に用いた。

結果および考察

(1) 整枝区と放任区の葉面積指数(LAI)を1ヵ月ごとに調査した結果、定植3ヵ月後に整枝区は放任区の約2分の1となり、それ以後は平行線をたどり、5ヵ月後には放任区のLAI約4.4に対し、整枝区は約2.5となった。この間の収量は、整枝区は放任区の90%前後で推移し、品質においては整枝区が著るしく高い上物率を示した。

(2) 摘葉の程度を5段階にした整枝の結果、主枝の伸長、側枝の発生割合、収量、品質ともに摘葉程度の軽い区で高くなり、前年と同様に葉数の多少、草勢と密接に関連する傾向が認められた。

(3) 葉位および葉数(葉面積)が果実の肥大に及ぼす影響は、葉数の影響が強くと認められ、葉数の多い区で肥大日数が短縮された。単位葉面積当たり肥大量は葉面積の小さい区で大きく、主枝葉では果実に近い葉位の影響が大きい傾向が認められた。品質においては葉数の少ない区で果形指数が小さく、品質の低下する傾向が認められた。

第1表 整枝の有無と葉面積、収量、品質 (2区平均)

試験区	調査時期	葉面積	葉面積指数(LAI)	収量指数	上物率
放 任 区	月日	cm <sup>2</sup>			%
	2.21	3,932	0.655	—	—
	3.21	11,317	1.886	100	78.2
	4.21	19,821	3.320	100	59.0
	5.21	22,255	3.709	100	53.8
	6.21	26,630	4.438	100	57.6
整 枝 区	2.21	3,710	0.618	—	—
	3.21	8,599	1.433	103.5	95.8
	4.21	10,015	1.669	87.4	76.6
	5.21	12,648	2.108	90.8	72.6
	6.21	15,433	2.572	91.4	72.3

第2表 葉位、葉数と果実肥大 (10果平均)

試 験 区	葉面積	100g 葉面積当たり肥大日数	葉面積100m <sup>2</sup> 当たり肥大指数	果形指数	上中物率	
主 枝 果	cm <sup>2</sup>				%	
	着果下4葉区	1,241	14.4	100	3.89	75
	上4 "	1,011	14.9	118	3.80	70
	下2 "	505	19.0	188	3.62	60
	上2 "	502	20.8	170	3.66	40
側 枝 3 葉 区	493	19.4	182	3.65	56	
側 枝 果	主枝葉下4葉区	1,090	17.4	95	3.61	57
	上4 "	1,144	19.2	82	3.66	43
	側 枝 3 葉 区	455	21.6	182	3.70	50

以上の結果、低温、寡日照期の整枝、摘葉処理は誘引角度とも関連するが、葉面積指数(LAI)2.2~2.5程度の葉面積を確保するよう、主枝の着果下位葉2~4葉を残し、側枝は摘心切戻しとするのが望ましいように思われる。